

臨床的に見た非行児に導く親のタイプ

愛媛帝京短期大学

桜井武男

これは論文と云うような片苦しいものではない。しかしこの集積されたケースの中に私達は問題児の親として共通の条件を発見することが出来る。それは経済的貧困でなく、精神的貧困という原則である。反省のない人間失格は自ら招いた生活態度の中に益々形がゆがめられこうした親が自分の子供を問題児、非行児に追いこんでゆく。

庭に有力な資産があっても、子供を育てることに失敗をする親は、やはり育成能力がない訳であり、言いかえれば「資格のない親」の烙印をおされるものと考えられる。
 一般に問題をもつ親からは問題をもつ子供が成長することは、人間形成の原理である。そうした親には十の型が考えられる。それらについて、例をとってのべてみたい。

第一、放任無関心型

× × ×

ある朝のこと

「父ちゃんと母ちゃんがおらんようになった、おじさん探して」と、言っ来て来た小学五年と三年の男の子二人がやって来た。

「父ちゃんも母ちゃんも、どこかへ働きに云ったんじゃないのかい」

「ちがうよ、家にな荷物もないぜ」

よく聞いてみると、昨夜は一緒に両親も家にいたそうである。荷物もないと云うので不思議に思っ、

「それでも荷物もなんにもないと云うのはおかしいが、何ぞあるだろ」ときくと、

「家な、いつも荷物なんかいないよ」

- 第一 放任無関心型
- 第二 虐待型
- 第三 人権無視型(利己主義型)
- 第四 性的紊乱型
- 第五 情緒不安定型
- 第六 不和型
- 第七 溺愛型
- 第八 差別型
- 第九 多子型
- 第十 精神薄弱型

問題のある親

「問題のある親」と云うことばは、子供を育成する資格に欠ける親と解した方がよいと思う。経済的能力とは関係がない。たとえば家

それでも、おかしいと思ったので、

「ふとんや、お茶碗なんかあるだろ」ときくと、

「そのなの何もないんよ」と云っていた。

とも角、子供を保護して、その家に行ってみると、全く空屋のようになつていた。夜中の間に荷物をまとめて子供を置き去りをしたのだった。

ただ子供のねていたふとん丈が淋しくしいてあった。

親が子供の搜索願に来るのが普通であるのに、子供が親の搜索願に来たりするのはめづらしい。

ある家で、客があつて、帰り際に、

「私の靴はどこでしょうか」とたづねた。

「さあ、見当りませんが、犬でも持つて行ったんでしような」とそのおかみさんは答えた。

実はあとで分つたことだが、そのおかみさんは、自分の子供に客の靴を近所の行きつけの質屋に持つて行かせて、お金を借りて来て、それでお菓子を買つてこさせ、そのお菓子を客に出したといふのである。

何のことはない。客は自分の靴をたべたようなものである。

ある若い女の人が

「子供を預つてほしいのですが」と云つてやつて来た。

「どんなお子さんですか、一応事情をおききたいのです。それでお子さんは男のお子さんですか、それとも女のお子さんですか」ときくと、

「それが実はまだ分りませんので……」

と云うものだから、私はたまげて、

「え、ではあなたのお子さんではないのですか」

とくりかえしてきくと、

「私の子なんです、一寸事情があつて」と云うので、

「それは事情がおありのことはよく分りますが、男のお子さんか、女のお子さんかそして年位はお分りでしょうか」ときくと、

「え、それがまだ生れてないもんですから」と答えた。

私は全く開いた口がふさがらなかつた。

内密で出来た子供について、生れたら、あづかってもらいたいと真剣な気持で来たのだから、何だか生れぬ先から予約に来たような気がして変な感じがした。生れる子供が可愛そうだと、泌々思つた。

ある人などは、生れて三日目の子供をつれて来て、あづかつてくれと云つて来たこともあつた。

中学一年に相当する子供が独りでやつて来た。行く所もないので保護をした。所持品のうちに、封筒の中に部厚い書類が入つているのが見付かつた。それは戸籍謄本と父親の履歴書であつた。戸籍謄本の裏にはペンで「我もし不幸なりせば、この子のことはよろしく願います」とかかれてあつた。

履歴書は五年位の間に十カ所ほど父親の転職先がかいてあつたがどれもこれも「〇〇会社社長」「〇〇会社常務取締役」と肩書丈は皆一流のものであつた。

あとで調べた結果父親は詐偽罪で拘留されていることが分つた。悲しい父親の子を思う涙のあとが窺われたいとは云えないが、一面その放任的な面も考えられない訳ではない。

ある日のこと、二十才位の学生がやつて来た。

「子供を預ってくださいか」と云った。

「あなたの知り合いの家のお子さんですか」

と相手が若い学生だったので、きいてみた。すると、

「私の子供です」と小さい声で云った。

「お子さんはどこにおられるのですか」と聞くと、

「外に待っています」と云って、その学生は窓から手招きすると、

やがて若い女の子が赤坊をだいて入って来た。

色々事情をきいてみると、二人は好きで同棲しているうちに、赤

坊が出来てしまったのだった。赤坊は四十日目になる栄養不足の

子供であった。その男の学生は相手の女——勿論これも学生——

が嫌になったと云っており、女の方でも別れたいと云っていた。

四十日目の赤坊にしては何だか元気もないので、乳が出ないのか

と思つて聞いてみると、

「乳をのますと、情がうつるもんですから人工栄養でしていま

す」と、事もなげに答えるのだった。

そして、この二人の学生の親は、子供が出来たなどとは夢にも知

らないのだった。とも角乳児院に入れることにしたが、こんな宿

命をもち、望まれずして生れた子は、親よりも、施設の方が、も

っともつと幸福に育つのではないかと思つた。

第二、虐待型

中学三年になる男の子を父親——(継父)がとても厳しく育てて来

た。母親は盲愛に近い愛情をそいでいたが、父が火葬夫をして

いることにこの子は何となく劣等感をもっていた。時には反抗を

し、敵意さえ示していた。ある日、云うことをきかないと云って

焼場の窯の中に子供を入れたことがあった。

こんなことから、この子について保護を依頼され、ある施設に卒

業させるまで置いた。卒業してある写真店に就職がきまったのに

三日も経たない中に逃げて帰った。どうしてあんなに就職をい

やがったのかをきくと、その子は、

「暗室に入るのがいやだ」とただ一言いっただけであった。

× × ×

ある六才になる女の子を保護したことがあった。極度の栄養失調

で立つことも出来ないし、坐らせると、すぐ横になってしまうと

云つた程の子供であった。

家庭でも随分びびく虐待されていた。一日中誰も居らないまま子

供だけをのこし、食べるものもないまま放任していた。余り腹が

へって、自分の出た蛔虫をたべたことさえであった。

何日風呂に入らないのか分らん程悪臭がしていた。大小便さえ、

始末してやっていたいかなかった、そして腹だけがふくらんで見るから

に哀れな子供であった。風呂に入れた時に、余り軽いので浮いた

ということである。

× × ×

八才になる男の子が保護されたことがあった。頭が五・六カ所、

毛がぬけて、じくじくしていた。

父親はこの子が憎くて、云うことをきかないと云うので、荒縄で

くくって、天井の梁からつり下げ、薪でたたき、それでも腹の虫

がおさまらないので、水をかけ正気を失ったときに、頭の毛をひ

きちぎったというのである。

保護している間、人さえ見ると、かみつこうとして手におえない

子であった。この子は愛情を求める手段を知らないために、噛み

つくことだけが唯一の方法であった。

幼児時代に虐待された子供は、異状性格になる危険が多分にあ

る。そして、大きくなってから、その不満の代償行為として、社

会の人々にその敵意と反感をもってくる。幼児を虐待することは即ち、人間の心から情操を破壊するのと何等変りがない。

ある父親、それはとても気が短かく、朝から子供に口言を云わない日がないと云った程の男であった。母親は父親との意見が一致しないで、父親が子供を叱れば叱るほど、かばうという風であった。ある日、子供が云うことをきかないと云うので、その父親は子供のえりがみをつかみ、目よりも高くさし上げて、三米も下の川の中へ子供をほうり投げてしまった。幸い子供は大した怪我もなかったが、全く乱暴な父であった。やはりこの子は父親をきらい憎んでいたが素直さのない一面が強く見られるようであった。

ある子供は父に虐待され、父をとて憎んでいた。ある日、この子は何の気なしに一枚の画をかいた。それは墓の画であった。線香と花が供えてあり、墓石の上には、父親の名をかいていた。その子の父親は元気で別に死んだのではないが、その子は心の中で父親を抹殺していたのである。

又、ある老父が孫をとてきらっている家があった。孫は五才でとても可愛らしい子であったが、祖父に対してはひどく恐れていた。ある日一枚の画を見せてくれた。それは自動車の画であった。

「上手にかいたね」と云うと、にこにこしていたが、

「先生をのせてくれるか」ときくと、

「ちがうよ、ちいちゃんがのるんだい」と云った。

「ちいちゃんはいいいね、こんなきれいな自動車にのせてもらって」と云うと、

「あのね、この自動車はね、葬式の自動車だい」と云った。

その自動車の上には十字架がついていた。

第三、人権無視型（利己主義極端型）

ある子供を丁度三日間の休暇を与えて、施設から家庭に帰したことがある。勿論家庭と云っても、父親は長病らいでねており、母親は日かせぎに出ていた。丁度子供が帰って来た時に、父親は、子供が風呂敷包をもって見たのを見て、

「それ何じゃ、あけてみい」と云った。

子供は施設の方から米を少し持たせたのだった。子供の食料として持たせた米が風呂敷包をとくと、出て来た。父親はそれを見る

「おっ、ええもん持って来たな、もう他にないか」と聞いた。

その子は小使銭としてもらったお金——それも今迄に貯めていたお金三百円を父親の前に出した。

父親は子供に、

「もう帰れや、そして今度来る時、又ええもんもらって来い。」と云ってその場で追い帰してしまった。

ある子供が家庭環境が悪いので施設に入れた。父は大酒呑みで、なまけものであり、母親は継母で子供を虐待するので、三年前に施設に入れ、ともかく中学校だけは卒業させた。丁度卒業してすぐに、ある商店に就職させることにした。家庭にこのことを通知しておいたが、さぞ喜ぶことだろうと思った。ところが、ひょっこり父親が或る日訪ねて来た。それまで三年間一度も顔もみせなかった父親であったが、子供のことで喜んで来たのかと思った。ところが、こんなことを云った。

「就職となると、何かとしてもやらねばなりません、私も生活に困りますので、何もしてやれません、支度金でも都合していただけのものでしょうか。」

支度金としては別に出せないのであったが、幾らかの金を渡し
た。子供には新しい服を持たせたのだったが、父親は子供の就職
先に出かけて行って、子供に会った。その新しい服を大切にしま
っておくと云って父親は子供からあづかって帰り、おまけに、借
金まで子供に残して、こんどは姿をくらませてしまった。母親に
その後連絡したが、全然父親の行方を知らず、全く子供をだしに
した憎むべき父親であった。

ある十二才になる女の子が、表で鈴をふって、ご詠歌をうたって
いたので、その子を上にあげて、一応保護することにした。その
後、父親の方に連絡をした所、早速やって来た。父親と云うのは
橋の下で乞食をしている男で、子供を使って物乞をさせているこ
とが分った。こんなことをさせては法律に違反すると云うと、
「そんなことを云っても、この子は日に三百円もかせいで呉れま
すのでな」と云うだけであった。

とも角、環境が悪いので保護することにした。学校へは長い間行
っていない子であったが、ご詠歌は、ほんとうに上手であった。
施設に入れて、学校にもやらねばならないので、三人の他の子供
達と一緒に汽車で連れて行くことになった。偶々、汽車が丁度鉄
橋にかかろうとした時、急に窓をあけて、むこうに見える木橋を
指さして、

「うち、あそこに居ったんや」

と叫ぶので、他の子供達も、その方を見て、

「家なんか見えんよ」と云った。

すると、その子は、

「あの橋の下に居ったんだい」と云った。

見栄も外分もない純真な子供の姿には、熱いものがこみあげてく
るのであった。

ある日のこと、盛装をした三十五、六の女の人がやって来て、
「子供を預ってほしいと」申出てきた。身なりは実に立派で、時
計をはじめ、腕環やネックレスまでしており、衣裳も仲々立派な
ものであった。ところが、子供たちは、みすばらしいなりをして
いた。

事情をきくと、主人は行方不明で、住込みで働かねばならないの
で子供を預ってくれと云うのであった。止むを得ないので一応保
護することにしたが、子供たち——十才、七才、五才、三才の四
人——を置いて帰る時に、他の保護している子供たちに、
「家の子をいじめたら承知せんぜ」と云って帰って行った。

こんな母親にかぎって、子供を預けっぱなしである。今迄にこん
な母親は、行方をくらましてしまったのが多かった。

一人の老婆が入院していた所へ、ある若い女の人が六カ月の赤坊
をつれてやって来た。

「おばあさん、赤ん坊を見せに来ました」

これをきいた老婆は、きょんとんとしていた。と云うのは、今迄に
一度もこの女の人を見たこともなかったからである。

「おばあさん、私は、あなたの息子さんと結婚して、子供が出来
たもんですから、見せに来ましたの」

これを聞いて、老婆は二度吃驚して、あいた口がふさがらなかつた。老婆は、

「私の息子は、もう二年も前から行方が分らんのですが、あんたうちの息子と結婚したんですか、それでどこにおりますのじや」

その女の人は、

「大阪におりますのです」

「大阪のどこです」

そのとたんに、

「おばあさん、私一寸子供におもちやを持って来て、そこにおいとりますから、一寸とって来ます」

と云って、そのまま二度と姿を現わさなかった。勿論、赤坊は老婆の手に置いたままであった。

早速知らせをうけて、保護することになった。

X X X

これもある五十年輩の実直そうな男の人が、夜訪ねて来た。そして小学校四年の子供をつれて来た。子供は別室で遊ばせている間に、この男の人はこんなことを云った。

「私じゃ若い時分、友人に何ぞええもんがあったら呉れんかと云ったら、その友人が、そうだな、もって行ってやろうと云うもんですから、二・三日待っていました。私じゃ若い頃は土方をしておりまして、その仲間は同じ飯場はんばにいました。ある日家へ帰ってみますと、家で女房が赤坊を抱いているので、それどこの子じゃと、云いますと、女房は、あんたが友人に、何ぞええもんがあったら呉れと云ったんじやそうで、今日持って来て呉れたんですよ私じゃ何ぞええ物をもって来てくれると云ったんですけん、まさか人間の子を持つてくるとは思いもよらんことでしたわい。まあ私じゃ少々酔っていましたんで、まあええそのま置いて育てたらええわい、と云って育てましたのが、この子でございます。」

と云うのであった。全く驚いてしまった。

結局連れて来た子の性格検査を依頼に来たのであるが、この男の人につれて来た友人の人間観には驚く外なかった。

第四 性的紊乱型

X X X

子供が性的に早熟であったり、性的非行をするのは、皆大人の無責任、無反省な言動がその誘因をなしている。

ある八十才になる老人が中学一年生の女の子に性的ないたづらをして困ると云う相談をうけたことがある。それも露骨ないたづらで、お金を与えて子供をひきよせては可成りの性的遊戯をするというのである。結局、この子を離すことが、まづ最初の方法と考

えたので一応その子を預るようになった。しかし両親は、全然無関心で、そんな馬鹿なことがと云って相手にならず、近所でも色々うわさが立っているのに、両親の方が平気であった。

十五才で妊娠した子供があった。両親が目が不自由なために、子供が大人の性行為を見しまったと云うのである。早熟になった子供が近所の男の人にだまされて、交際している中に外泊することも重なり、いつの間にか妊娠してしまった。性的非行児を保護するのが最もむづかしい。大人の一面をみているだけに、素直な面が少なく、夢も、希望も失った子供にとって、ただ転落の一途あるのみである。

過ちを犯した女性は殆んど男性から棄てられていることは次の表でも分る。

八名

男とすすんで別れたもの
二十二名

男と関係をつづけた

男にすてられた

三十六名
八十三名

又、男関係はうまく行っているかと云うのについては、

未婚のままである

一〇七名

過ちを犯した男と結婚

六名

他の男性と結婚

二一名

不明

一二名

となっており、主として次のような家庭におきやすい。

淋しい暗い家庭

淫らな家庭

厳格すぎる家庭

母親の指導が不十分な家庭

× × ×

子供たちに大人のみにくい場面をみせる位、罪なものはない。子供達は作文でこんなに訴えている。

子供の作文

私と近所の子と五人で浜へ遊びに行きました。みんな荷物を芝生の上において、かくれんぼしたりして遊んでいて、一人の女子が私の所へ来て、私気持悪くなっちゃったと云いました。どうしてと聞いたままあいから来て見いと云ったので、ついて行ってみると女が寝ていて、男が上にくっかっていたので、私はびっくりしました。始めてこんなのを見たので、私はもう少しで声を立てる所でした。これをみんなに話したら、物好きに私が行った所へ行ってみてみんなでおどろいて帰って来ました。(中一)

私は氷屋に入りました。そこにはきれいな服をきた女のひと、ベロベロによった男の人が氷をのんでいました。男の人がえん台からこ

ろがり落ちたので、その女の人が親切にそばまで来てその人を起そうとしましたら、男の人がキッスをしました。(中三)

母の同級生だったお友達のおばさんの家に子供がいないので、とまりにいらっしゃいと云ったので、その晩とまりに行きました。おじさんとおばさんの間にねました。そしたら、おじさんにおしりをさわられました。その夜はひやあせが出てしょうがありませんでした。そしたらそのおじさんが熱があるんじゃないか、気が悪いんじゃないかと聞いたので、自分がやったのに、ずうずうしくもよく云えると思いました。

第五 情緒不安定型

× × ×

叱ったり、皮肉を言ったり、軽蔑したり、差別したり、嘲笑することは子供の心の平衡をくるわせてしまう。これが情緒の不安定をおこさせるのである。情操欠陥は多くの問題児にみられる特質である。

子供の作文

父ちゃんいつも「バカ、そんなこと位分らんか」と云います。又「バカ早よ行かんか」とも云います。父ちゃんはいつでもバカと云ってから次のことはを云います。僕が「父ちゃん、バカと最初に云うことはやめて」と云いますと「バカ生意気なことを云うな」と云います。どうしても止められないのです。父ちゃんはよその人が来たときに云うかしらと思っけいたけれど云いませんでした。僕や弟にだけ云うのは子供だから馬鹿にして云うのだらうと思う。(中一)

× × ×

ある日、小学校五年の子供が六才になる幼児をつれて、

「先生ここにおいて」と云って来た。

事情は父親にひどく叱られたと云うのである。丁度ごはんをこの子が炊いていた時、炊きそこだったので、焦げた分をそっと庭にすて、少しばかりどんぶり茶碗にいれておき、新たに炊いている所へ父親が帰って来て、

「お前らはわしの分まで食うてしめたのだろう」と云って、いきなり炊きかけた釜ごと、この子供に投げつけたのだった。子供達二人は逃げあるいて、ここへやって来た。

父親がしばらくしてやって来た。その子は窓から見えていたらしく、「父ちゃんが来た、先生おらんと云って」と云うなり、六才になる妹を布団の中にかくして、自分だけ天井裏に逃げこんでしまった。父親には、よく納得するように話をしてとも角家に帰ってもらい、子供達だけは暫く保護することになった。

ところが、それから幾日もたたない中にこの子の両親は麻薬密売で逮捕された。この父親の知人がある日、やって来て、「ここに子供二人がおるそうだが、誰もたのみもせんのに、いらんことせんでくれ、ここで子供が世話になっとたら、いつまでたっても、この子の親たちは、警察から帰してもらえんのですよ」とえらいけんまくでやって来た。

× × ×
ある七才になる男の子は、私が自分の頭がかゆいので手をあげて搔こうとしたら急に首をすっこめた。

こんな子は家でもよく叩かれつけている子で、自己防衛の態勢をよくこんな風にする事がある。

一寸おいでと云うと、両手を前にひろげて、後へしりぞく子供もある。こうした自己防衛の態勢をとる子供にかぎって、明るさがない。大人を見上げる目付にも警戒的などころがあり、うちとけ

て物を云うこともしない。

幼児の時に情緒が破壊された子供は、大人になってから社会的適応性を失い、とかく失敗をし勝ちである。

第六 不和型

両親の意見の対立が子供の前行われるくらい弊害のあるものもない。子供は親のけんかを不安そうに見守っている。そして外でこんなことを云っている子供があった。

× × ×
「お前とこの父ちゃんはたたくことあるか」「うん、うちの父ちゃんはな、たたく時はひどいよ」

「なんでそんなにたたくんや」
「あのな、この間父ちゃんが、うちの母ちゃんとけんかをして、母ちゃんがひどうたたかれた。」

そして母ちゃんが「やったね、おまえさん」云うた。
そして母ちゃんが、もうこんな家におらんと云った。けどいつもじゃけん、母ちゃんそのうちに帰ってくると思たら、やっぱり、晩になったら帰って来た。

この会話は、ある日曜日、何気なく窓から外を見ていた時に、三、四年生位の小学生が二人で立ちどまっていたときのものである。

× × ×
中には、母親の権力の強い家庭がある。

「父ちゃん、朝からぶらぶらしとらんで、さっさと掃除でもしなさいよ、しゃんしゃんしてもらわんと困りますよ」

などと主人がみかみ云うような奥さんがある。又それを父親の方では、

「はいはいすぐしますよ」

などと子供の前でしているのがある。子供は父親の云うことも聞かなくなる。この反対の父親がやたらに権力をふりまわす家庭などでも、やはり子供は云うことをきかなくなる。

父親があまりだらしがないと、

「お前もちゃんとして勉強しないといかん」などと云っても、子供の心の中では、

「しゃんとしなといかんのは、父ちゃんじゃないか」と考える。

× × ×

子供の作文

外でいやなことがあったからと云って、家にまで不気嫌にしている。外でいやなことがあったからと云って、家にまで不気嫌にしている。子供には気軽に話しかけてほしい。(高三)
父が子供時代に体験したことを子供にやらせようとするのは、どうかと思う。お父さんの子供の時、冬でも足袋をはかなかったとか、異性と親しく話はしなかつたとか、体験談としてはいいが、強いられるのはいやだ。(大学二)

子供達の前でお母さんを叱ったり、軽蔑したりするのはやめてほしい。二言目には、「このバカが」とか「この位のことに分らんのか」と言ってお母さんを怒鳴りつけるのはやめてほしい。そんな時のお父さんは、もっとバカに見える。(高二)

父の考え方が古いのは仕方がない、自分だけが正しいように独断的に云い張るのは、こっけいだ。子供の意見をよくとり入れて、考えて判断をしてほしい。(二十才青年)

夫婦げんか位不愉快なものはない。私の試験の成績が悪いと云ってお母さんに小言を云い、それから夫婦げんかになる。そんな時は家は家におりたくない。どこかへ行ってしまうたい。(高三女子)

第七 溺愛型

子供は過度に愛された場合、失敗をしやすい。自立心が失われ、責任感が乏しくなり、依存心が強く、困難にうちかつ抵抗力が弱く、自分の失敗に対して反省心に欠け、不平不満の方が大きくなるといった、最も人間形成の上に障害となるものが多く目立ってくる。

殊に幼児期において自分の当然出来ることさえ親が手伝っている場合、これが習慣となって、次第に我儘になることはよく見られることである。

よくきくことであるが、母親の云っている言葉をみてみると、

「雨が降ったら傘をささないよ、」

「自動車が来たらよけなさいよ」

こんなことはよく考えとおかしいことである。こうしたことばかり云っていると、つい子供が学校へ行く時に、

「おべんとうをたべる時は、蓋をとるんですよ」などと滑稽なことを云ってしまう。

× × ×

子供に小遣金を必要以上に与える親がある。子供の云いなりになって、親に毅然とした所がないために失敗した例がある。ある大学の教授が息子を東京の高校に入れていたが、不自由をさせてはいけなれと思つて月に五万八千円も送金していた。小さい時から溺愛していたために、遠い所に子供を置くのがとても心配であつたらしい。この学生は金が自由になり、暇があり、こうした好機を悪い連中が見逃す筈がない。悪い仲間にはさそわれて、次第に

不良化して行った。新宿御苑の裏で通行人の時計を盗り、強盗として現行犯で逮捕された。知らせをうけた父親は気も転倒する程驚いたが、一人の子供を遂に罪に陥れてしまったのは、やはり親の責任である。金は毎月確実に子供の所に届いていたが親心は遂に届かなかった。

× × ×

一時世間を騒がしたこんな事件があった。父親は大学の心理学担当の教授であったが、長男を溺愛したためにしくじってしまった。

次男は秀才で、まじめな学生であった。次第に不良化した長男がある日、母親に乱暴を働いたので、つかつかとなって母親と次男が、長男を絞殺してしまった事件である。父親が心理学者という特別な立場であっただけに、その反響は大きく、世間の耳目をそばだてたのであった。

とも角子供を溺愛して失敗した事件は余りにも多い。

× × ×

「死んでも学校なんか行かん、精神病院に行くんだ。」と云って暴れる中学三年の子供について相談をうけたことがある。

父親はある学校の社会科の先生をしていた。父親が子供の頃、祖母（父親の母）は、頭のよい子だということで、盲愛に近い可愛いがり様をした。嫁が来ても、自分の息子のことを特にほめ、こんなよい息子に、つまらん嫁が来たと云って嫁のことを余りよく云わなかった。子供が大きくなっても、祖母は、相変らずであった。父親は、熱心な先生であったが、子供のことはどちらかと言えば母親まかせであり、母親は子供を盲愛するだけであるが、子供は祖母をきらい、父母に対しても余り親しきもっていなかった。殊にこの子は祖母をきらっていた。

子供は父親が教え子を自分の家によせて楽しそうに話をしたり、遊んだりしてもそばにもよりつかない位であった。しまいに子供はこんなことを云った。

「お前は学校で先生をしとつても、わし一人よう教えんだろ」

自分の父親のことを「父ちゃん」と云わずに「お前」とさえ云ったりした。

第八 差別型

人間が差別される位、悪い結果でもたらずものはない。殊に子供が大人が差別するようなことをすると、子供の心から、社会的適応の能力さえ失わせてしまう。差別されると、子供は素直さを失う。純真さ、素直さこそ子供の生命である。云いかえれば差別をすることによって、子供の精神的生命をうばう結果さえ生ずると云っても過言ではない。

× × ×

「兄ちゃんを見なさい、成績もいいし、云うこともよくきくでしょ、あんたみたいに成績の悪い子は、ほんとに見たこともない」などと云って子供を追い込ような叱り方をする母親がよくある。「見たこともない」などと云って、毎日顔つき合わして、こんなことを云うのもおかしいものだが、子供はこんなに叱られると、劣等感、反抗心が心の中に先に現われてくる。

「自分だっている所はあるんだ」と云う気持はどの子供にも持っている。内面にもっている自尊感情を傷つける位、性格を歪めるものはない。殊に比較して相手をけなすような態度をすれば一層内面の葛藤がはげしくなり、好ましい環境の適応性までも失われてくる。本人は比較され、自尊感情を傷つけられる度合がはげしくなればな

る程、普断は何でもないようなことでも、それが不満の原因になり、遂には、皮肉を云い、不平をならし、おだやかな云い方さえ失われ、円満な人間性が次第に欠けてくるようになる。

× × × ×
× × × ×
× × × ×
× × × ×

身体や能力について差別的な云い方をすると、それが自分の失敗の原因でないのに、そんなに云われることに對して、ひどく憤りを感じるのである。

「あんたは、背が低いな、どうしてそんなに低いんだろ、ほんとうに低いな」

などと云われる方では、背の低いのは自分のせいではないと内心考えている。

「あなたの片一方の目がもう一寸大きかったら」などと云われたら全く致命傷である。冷等感をたえず意識して生活する緊張感は、やはり積極性を欠き、何でもないことに自分を失敗の中におくことさえある。

ある子供が帽子をどうしてもとらないことがあった。食事の時でも、眼る時でもとらなかった。

その母親は、

「あなたの頭は禿が一寸あるんで、ほんとにみぐるしい、墨でもぬったら目立たんのにな」と云った。これからこの子供は、帽子を頭から離さないようになった。

「あいつは生意氣だ」「あの子は人におじぎも出来ん」などと云われたことも再々あった。この子は帽子をとって人に挨拶することが、たまたまなくいやになってしまったので、人からもこんなに云われたのであった。

ある両親は子供が知能のおくれているのに気がつかないで、兄も姉

も皆高等学校を出たのだから、この子も当然入れないといけないと

考え、勉強を強いた。この子は勉強するのが死ぬほど辛いと云うことを保護された後に云っていたが、とに角勉強と云うことばをきいただけで、身が縮む思いがしたのであった。氣だてがよくて、人にたのまねなくとも、畑仕事はすすんですると云うよい一面も持っていた。夜おそくまで坐らされて、何も分らないのに勉強を強いられたことが、この子にはたまらなかつたのであった。生来体が弱かつたので、体的にも勉強はつづかなかつた。父親は大酒家で、酒ののんだ時など子供を叱り、いつも、

「お前の様な頭の悪い子は世の中で役に立たん、勉強が出来なきや出世はせんぞ」と云ったりした。

丁度兄弟が何でもないことからけんかをした。兄が

「馬鹿は死ななきや直らない」と父親からきいた言葉を弟に云ってしまった。母親もそれに余り賢明でなかつたと見えて、

「あなたの様に勉強ざらいの子は家におらんでもいい、どこへでも行ったらええ」とつい云ってしまった。この子は出がけの駄賃にと隣の家にしの子びこみ八千五百円をとり、大阪へ逃げ、途中岡山でつかり、ここへ送られて来た。

「先生勉強のない所だったらどこへでもいく」と云っていた。

第九 多子型

子供が多いこと自体が問題の親であるとは云えない。どの子どもも健康で、知能も人並で、生活も困らない家であれば、子供が多いことは却って喜ばしいことである。しかし乍ら、生活に苦しく、子供も云うことをきかないし、知能も低いと云うことになる問題である。なお、家が貧しくとも必ずしも問題の子供が出るとは限らない

けれども、子供をみてゆく暇のないほど貧しいと云うことになる一つの問題である。

× × ×
ある十一人の子供をもち、家庭も貧しく両親も余り賢明でない家庭があった。この子供達のうち、四人まで知能が低くて学校へやってもだめな子供であった。父親は、子供が多いことを余り気にしている風でもなく、

「私しゃ山におりますのでなあ、他にたのしみもございませんので、子供ばっかし出来てしまいました。まあ子供も賢こかったらよかった、ですけど」と云っていた。母親も、

「まあ、そのそちにはええのも出来ませあ、それでも学校へ行っても出来ん子は困りますんで、何とか、あづかっておもらいする訳にはいきませんでしうか」と云うような、案外不幸を意識しない気の毒な人達であった。

× × ×
ある父親は生活保護の金をもらうと、鍋と釜をもって、ふらっと家を出て、金がなくなるまで帰って来ないので、子供達をたべさせることが出来ないと言つて相談をうけたのがあった。

子供が腹がへって近所の物をとると云うことで、近所の人も困っていた。

家に行つて驚いた。

炭小屋にやぶれた畳が二枚敷いてあった。畳は凸凹になつて、じめじめと黒ずんでいた。子供達の寝小便がたまつて、それがふまれて、ひっこんでいたのがあった。中にはもう一枚藁だけになつている畳が立てかけてあり、竹の小枝がうづ立く散乱していた。食器も何もなかった。やぶれた黒ずんだぼろ布が五・六枚入口においてあった。勿論入口と云つても戸もない有様で、そこに五

才、七才の二人の子供が、足を土の上になげ出し、頭を戸口のしきいにおいてねころんでいた。

両親と子供五人がこの二畳の炭小屋に寝起きをしていたのであった。

私はとも角、母親と子供五人を自動車にのせて一応保護するためにつれて帰った。上の雙子は見分けがつかない位よく似ていたが学校でもらつた学用品を、うれしそうにかかえていた。

臨時に風呂に入れ、母親もさっぱりして出て来た。子供たちも何日風呂に入らなかつたか知らないが、自動車の中では、たまらない程悪臭がただよつた。

風呂から出た母親は、子供たちが、さっぱりした衣類をきているのを見て、

「これどこの子ですな」と云つた。

おどけた一面もあったのだと思う。夜になつて、小さい子供たちは、うつむいて、丸くかがんで寝るので、又足を伸してやると、又体を丸くかがんでしまう。狭い家の中で、いつもこんなにして寝ていたのを見て、この癖は、四・五日直らなかつた。

父親も、母親も、今では一生けんめいに働いて、子供達をいつか又迎えたいと云つて、はり切っている。

× × ×
結局、両親がいそがしすぎて、子供の生長に目をむけて行くことが出来ない場合は、そこにやはり問題がおきてくる。

家庭はただ単に人間の集合場所ではない。よい環境に合せてゆく努力がなされないう限り、いつまでたつても向上はない。まして貧困多子ということは最も悪い環境を自らの中に形成してゆくことと異なる。

産めよ、殖せよの時代は過ぎ去つた。人間は不幸は外から来るもの

でなく、内から来るものであることを意識して、これに万全の努力を尽してゆく時には、必ず幸福の訪れることが信じられるであろう。

第十、精神薄弱型

親が知能が低くなくても、精神薄弱の子供をもつことは多い。こうした場合、親が、子供を憎み、自分自身に罪悪感を抱き、出来るだけ世間にかくそうとする。これが却って子供を駄目にするものである。又その反面、知恵おくれの子供であるということを特別に悩み苦しむ、過度の愛情をむけて行つて、我儘な、自制心のない問題の子供を作り上げてしまうことも稀らしくない。

ある親は、子供が知能が低いのを気にして、再三施設に入れてくれと頼みに来た。とても熱心な人だと思つた。「どんな犠牲を払つてもこの子の為には私はいけません。どうぞ施設に入れて教育して下さい」と懇願する親であつた。

幸い施設の方で一名入れられる様になつたので入れることにした。

もう施設に入れてから三年にもなる前の話であるが、それ以来、あんなに施設に入れてくれたら、どんな犠牲でも払うと云つていたのに、施設に入つて以来、一度も親は子供の所へ顔出しもしない。今では親は行方不明になっているが、私はこうした親こそ、ほんとうに憎むべき親ではないかと思つてゐる。

精神薄弱児は家庭の協力が殊に大切である。勿論非行もそうであるが、一人立ち出来ない子供の将来を考えると、暗然たるものがある。

× × ×

ある男の子は精神薄弱児施設に五年もいた。やっとクリーニン

グの職を身につけて、ある洗濯店に住込み使ってもらふことになつた。所が、今迄一度も顔を見せなかつた父親が、子供の就職先まで行つて、子供から金を借りている。借りると云うのは形だけで、体裁よく捲き上げたことになつたのである。ほんの僅かな金、精神薄弱児の血と汗の金を、しほりとる親、こんな親が子供を駄目にしてしまうのである。気のよいこの子も次第に希望を失い、その店をやめ、転々として、居所が定まらず、遂に警察に保護され、又ここへ送りかえされて来たのであつた。父親は、ほんとうに分らず屋であり、全く手がかかない。

要するに問題の親と云うのは教養のない親と云うことである。たとえ教育があつても教養のない親は多い。そして、教養があつても不注意な親は、やはり子供を問題児にしてしまう。

ある娘は、母親と二人暮しであつたが、かなり我儘な娘であつた。母親ももて余していた。娘はある男と結婚を母親に相談もせず、きめてしまった。そして家を去るときに、母親がないて止めるのもきかず、「お母さん、結婚は自由にできるんですよ、お母さんが生活に困つたら、役場へ行つて頼みなさいよ」の一言をのこして、さっさと家を出てしまった。

こうした子供にしてしまつたのは、やはり母親にも大きな責任がある。母親は、自分にも可成り身勝手な所があり、やはり他に好きな男があつた。娘はこれを知つていたのである。ところが、最近、その男は、この女の方へ余り近よらなくなりむしろ、この母親は、男から棄てられたと云つた恰好で、丁度その矢先に、娘は家を連れてしまつた。

× × ×

又、ある大学生は、タバコを口にくわえたまま、

「先生、一寸分らんとこがあるんだけど、教えてくれませんか」
その先生は、

「君、まづタバコを口からとったらどうかね」
すると、その学生は、

「先生、古いですよ、アメリカ人なんか、こんな事はあたり前で
すよ。映画にもあったですよ」

先生はその学生の顔をじっとながめながら、

「君、アメリカ人にもつまらん人間はいるよ、なにもつまらん人
間のまねをするに及ばんだろ、第一君はアメリカ人でないよ」

こう云われた大学生は口からタバコを外した。

人間は何を云っても自由だという気持はやがて何としても自由だ
という行動の自由に移行する場合も見られる。教養のない人間に
とって共通の欠点であるとも云える。

子供は、大人を模倣して成長する。それがよいにつけ、悪いにつ
け、とも角模倣によらなければ、出来ないことが多いからであ
る。

そしてたゞ模倣だけに止らない。やがてその模倣は批判力が高ま
り、判断力がのびるに従って、創意の形をとってくる。このまし
くない行動は、かくて茲に生れ、一つの習慣となり、個性となっ
てしまう。殊に幼児の時代において、大人の誤った模倣は、ある一
定の年令に達すると、もはや拭うことの出来ないものにさえ、な
ってしまう。

一定の年令——それは十才と一般に云われている。この年令が將
来の人間性を決定するパロメーターである。